

1 「本質的な問い」による単元（題材）構想について

- 「自然災害とわたしたちの生活の関わりって何だろう？」という問いを設定したことで、社会科「自然災害からくらしを守る」、理科「地面を流れる水のゆくえ」、算数科のグラフの学習、国語科の紹介文の書き方の学習などつなげた学習ができ、より深い学びが展開できた。
- 身近で起きた「西日本豪雨災害」を学ぶことを通して、探求的な学習が展開できた。身近な地域の被害から設定した課題を追究していくことで、自分事として捉え「一人でも多くの命を守るために」という意識を高める学習が展開できた。そして、自分達・地域の生活を見つめ直すことができた。
- コロナ禍でゲストティーチャーを1名だけとしたため地域の方への取材の機会が限られた。そのため、災害時の地域の被害や救助活動、復旧・復興に向けた活動等、多様な情報を収集することが難しかった。
- 小中9年間を通して防災教育に取り組んでいる内容を整理し、単元構成を発達段階に応じて見直し、改善していく必要がある。

2 単元（題材）で育成を目指す資質・能力について

- 事前アンケートでは、「西日本豪雨災害」について正しく知っている児童は13人中6人。「知っている。」と答えた児童の中にも、この災害が地震だと間違えて捉えている児童もいた。しかし、緊迫した様子の資料を見たり、ゲストティーチャーの実際の話や聞いた話、他教科・行事との関連を図ったりすることで、「西日本豪雨災害」の原因や被害、被災した際の生活の変化などの理解が深まった。そして、命を守るための自助・共助・公助の考え方、取組について知ることができ、少しずつ自分達の生活で生かそうとする意識が芽生えてきた。
- 今回は、自治会長から画像等の大量の資料を提供していただいたため、児童の心にも響き学習に主体的に取り組むことができた。特に、3次、4次では「豪雨災害から人々の命や生活を守るにはどうしたらよいだろう？」という課題の設定、それを解決することを通して「次は調べたことを保護者や地域に伝えたい。」という意欲をもち、整理・分析・表現の力を高めた。
- 呉市の資料「平成30年7月豪雨災害～呉市災害記録誌～」やインターネット等を用いて課題解決を行うことを通して災害状況の情報や避難行動、防災に必要な情報を取捨選択したり、複数の情報を比較したり、関連付けたりして考える力を身に付けた。
- 自然災害や防災に関心をもち、避難所と避難経路、家庭の防災グッズの確認等を見つめ直し、保護者や地域の人に伝えたい、一人でも多くの人を助けたいと思いをもって、探求的な学習に取り組んでいた。そのため、リーフレットを作成して近所の高齢者に危険地域を伝えたり、新聞で防災グッズの準備を呼びかけたりする活動につなげることができた。
- グラフの見方や情報の比較・分類・関係付け、分かりやすい文章の書き方等、個人差があり、他教科で力を付けておく必要があった。
- テレビのニュースや新聞の記事だけではなかなか伝わりにくい情報もあり、資料を集めることが難しいと思った。今後、現地調査や一層の地域人材との連携も取り入れていきたい。



(児童作成 新聞・リーフレット)

3 「デジタル機器」の活用

- インターネットを使った調べ学習、資料の提示の際のタブレットの活用等、探求の過程の中でデジタル機器を効果的に活用できたため、児童が「西日本豪雨災害」を視覚的にとらえることができ、自分事として学習に取り組むことができた。
- 児童が学習したことをまとめたり、自分達の考えを表現したりするための「新聞作り」「リーフレット作り」「DVD作り」にデジタル機器を活用でき、有効だった。
- 児童が自分の考えを友達と交流する際、自分の考えの根拠となる情報を複数収集し、検証するなどの力を付ける必要がある。

別紙様式